The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	西洋化の構造 : 黒船・武士・国家
Author(s)	園田, 英弘
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39257
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	園田英弘（そのだ ひでひろ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　11482　号
学位授与年月日	平成6年6月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	西洋化の構造 —黒船・武士・国家—
論文審査委員	(主査) 教授　麻生　誠 (副査) 教授　菊池　城司　　助教授　伊藤　公雄

論文内容の要旨

日本の近代化のためには,西洋化は中心的課題であった。しかし，歴史的伝統も社会の成り立ちも異なる日本を「西洋化」するということは，いったい何を意味しているのであろうか。本書は，西洋化をたんなる西洋の文物・制度の導入という観点ではなく，西洋起源の制度と装置と思想の導入によって生じる，社会変動の連鎖全体を「西洋化」ととらえた。

この観点に立てば，留学やお雇外国人や書物から学んだことを通して，すなわち西洋をモデルにして日本を改造しようとする直接的な試み以上の意味を,「西洋化」という概念に込めることになるであろう。

一つの変革は，それに連動して新たな変革を引き起こす。一つの変革は，変革された部分と変革されていない部分との不整合のためにも，新たな変革を余儀なくされる。このように，一つの社会変動は，一つの社会の部分の変動に収まりきれない社会力学を内包している。社会の変革が本来的にもっているこのような力学を無視しては，日本における近代化のプロセスを充分に理解することはできないであろう。

学習し，他の社会に移植可能な制度と装置を「文明」と呼ぶならば，異なった「文明」の本格的な導入は，無数の変革の種をその社会に胚胎せしめる宿命をもつことになるであろう。また，そのような「異質の文明」の導入は，それまでの社会のシステムを支えていた人々の価値観を，大きく変化させずにはおかないであろう。

生活様式や価値観など，それぞれの国に固有の，容易に他の国には移植できにくいようなものを「文化」と呼ぶならば,「異質の文明」が導入され，その社会に定着し，安定して機能するためには,「異質の文明」は「文化」によって支持される必要がある。ということは西洋化のプロセスは,「文明」と「文化」の摩擦と融合が入り交じった複雑な歴史的変動のプロセスとなるであろう。西洋の「文明」は日本の「文明」と衝突し，やがて導入され始めるだけではなく，日本の「文化」の改変や再編成化をも促すであろう。

それは,「文明」レベルの変動に伴って生じたひと続きの社会変動を，日本の社会の体質の中に取り込むための，日本化のプロセスでもある。西洋起源の「奇」なるものの導入によつて引き起こされる「日本化」や，凍結されていた伝統の掘り起こしなど，さまざまな文化的連鎖反応まで含まれているのが，本書でいう「西洋化」概念なのである。

この複雑な歴史的変動のプロセス全体を，本書では「西洋化」という言葉で表現したが，それは西洋によって直接的に受けた影響，西洋の直接的な影響によって引き起こされた社会変動，さらにその社会変動に連動して引き起こされた社会変動といた次々に生じて来るものを，一つのまとまりのある歴史の流れとして理解したいと思ったからに外ならない。言い替えれば「西洋化」概念を最大限に拡大することによって，連鎖反応的に生起する一つの社会変動の全体を鳥観したかったからである。

本書では，このような「西洋化」の一つのプロセスを，第二部の「西洋化の深層」で海防問題やそれに引き続く一連の変革の分析を通して徹底的に後づけてみた。従来の常識的な「西洋化」観では，西洋の武器や制度の導入だけが「西洋化」と呼ぶにふさわしいであろう。しかしながら，「西洋化」を初期的な西洋の文物の移植の段階に限定してしまえば，日本の幕末以降の巨大な社会変動の広がりと深層を理解することができなくなってしまうであろう。

本格的西洋化は,幕末の軍事力の強化から始まったが,その影響は「軍事」だけに留まらない。武器の西洋化という一つの変革が,次々に新たなる変革を要請し,ついには武士の解体にまで至る一種の「西洋化」のプロセスをトレースした。

ところで，従来の西洋化に関する議論は,一つの弱点を持っていた。それは，西洋の世界は,「近代社会」や「工業社会」としてすでに完成しているという前提で議論がなされてきたことである。しかしながら，歴史の実態はそうではない。第一部の「西洋化の外部環境」や第三部の「西洋化の諸相」のモースを論じた部分で強調したように，一九世紀の西洋自身が,日本にわずかに先駆けて,急速に近代化・工業化・専門分業化を遂げつつある発展途上の国々であつた。

急速に変化しつつある社会が（西洋),変革を志向しつつある社会（日本）に対してどのような影響を与えたか，このような観点こそが一九世紀の中葉にはじまった日本の西洋化を理解するためには，重要なのである。

このような私の観点からすると，従来の研究は西洋の影響を非常に単純に考え過ぎている。すなわち,西洋の直接的影響あるいは学習という観点からの議論が多すぎるように思われる。西洋化を推進する側の意図も，たんに西洋の優れたものを学習し，日本に導入するということ以上の意味がある。第三部で森を論じたのは，西洋化の「構造」が目的合理的な観点からの西洋志向と，その学習成果を日本という現実に適応するという，ギリギリの攻めぎあいのなかから生まれたものであることを明らかにした。

論文審査の結果の要旨

特　色

1. 社会学的枠組を背景にしつつ，十九世紀の日本が体験した歴史的社会的変動の深層を明らかにした。
2. 特に武士身分の解体に関する考察は，そのテーマ自体重大であるにもかかわらず無視されてきた問題を，徹底的に分析している点で高く評価できるものである。
3. この武士身分の解体プロセスを通して，明治期の社会階層の再編成の過程とその特色を明らかにしている点も評価すべきものである。
4. 以上の特色を「西洋化」という観点から，社会階層，思想，情報などの相互作用を分析しながら，日本の歴史的変動のプロセスを統一的に把握した。

以上の理由によって，当審査委員会は本論文が博士（人間科学）の学位授与に充分なものであると判定した。